

発表要旨

マルマ語（チベット・ビルマ語派ビルマ語群; バングラデシュ・チッタゴン丘陵）には、語彙的な精巧表現（elaborate expression）のほかに、生産的な語形成による精巧表現が存在する。生産的な精巧表現は、大別して三種類ある。すなわち、(I) 名詞類にも動詞類にもかかわるもの、(II) 名詞類にのみかわるもの、(III) 類別詞にのみかわるもの、である。(I) では主要部が前部にあり、後部に *yaʔ* または *thi* という要素があらわれて韻をふむ。(II) では、主要部後置型のばあいには *-i* という韻をふむような要素が前部に、主要部前置型のばあいには *-aʔ* という韻をふむような要素が後部にあらわれる。(III) では、*tori* という要素を後置する。(I) と (II) ではイオン化 (ionisation) が可能であり、精巧表現を分解し、あいだに他の要素をはさみこむことができる。特に *-i* 型の精巧表現においては、助詞そのものが韻をふむように変化しうるのが特徴的である。また、*-i* 型の精巧表現とほぼおなじものが、近隣のチベット・ビルマ系言語であるクミ語やチャック語にもみられる。マルマ語はチッタゴン丘陵の共通語であることから、クミ語やチャック語にみられる形式は、マルマ語からの構造的借用によるものと推測される。

1 はじめに

1.1 マルマ語とは

マルマ語 (ISO 639-3 *rmz*) は、バングラデシュ・チッタゴン丘陵を中心にはなされるチベット・ビルマ語派ビルマ語群 (Burmish group, Tibeto-Burman) に属する言語である。マルマ語は、隣接するビルマ・ラカイン州やバングラデシュ・コックスバザール市周辺などではなされるラカイン語 (ISO 639-3: *rki*) とちかい関係にあり、ビルマの公用語であるビルマ語 (ISO 639-3 *mya*) と方言関係にある。

1.2 マルマ語と先行研究

マルマ語についての研究は、マルマ語の概要を報告した Konow [1903] を嚆矢とする。その後、マルマ語の音声について記述した Bernot [1958] や藤原 [2003] がでた。マルマ語とビルマ語やビルマ語アラカン方言（ラカイン語）を比較したものとしては Maggard et al. [2007] や Huziwarra [2008]、Davis [2014] などがある。Huziwarra [2011] はマルマ語における名詞化をあつかう^{注1}。だが、いずれもマルマ語の精巧表現についてはあつかっていない。

1.3 表記上の注意

- (1) a. マルマ語の音素は /a, e, i, ɔ, o, u, ə; k, kh, g, ŋ, c [tɕ], ch [tɕʰ], j [dʒ], t, th, d, n, p, ph, b, m, y [j], r, l, w, θ, ʃ [ç], h, ʔ/ である。
- b. 声調は、高声調 (´)、低声調 (記号なし)、上昇調 (ˊ) のほか、緊喉調 (-ʔ でおわる音節のみ、音調としては上昇調) と固有の声調をもたない軽声 (ə からなる音節のみ) とがある。
- c. 音節構造は、概略 C(G)VC/T であらわされる。このうち、介子音には /y, r, w/ のみが、語末子音には /ŋ, ʔ/ のみがあらわれる。二重母音には /ai, oi, ɔi, ou/ があり、いずれも原則としては閉音節でのみあらわれる。

1.4 精巧表現とは

精巧表現 (elaborate expression: Haas 1964 など) とは、東南アジアや南アジアおよび隣接地域で多用される表現方法のひとつであり、対句法 (parallelism: Solnit 1995、加藤 2005、倉部 2011 など)、反響語 (echo word: Emeneau 1938 など) といった用語で言及されるものと同様のものといってよい。精巧表現には (A) 意味的に対になる要素を並列する、あるいは (B) 韻をふむように無意味要素を付加する、という特徴がある。たとえばマルマ語 (M) にもビルマ語 (B) にも共通するものとして、(2) にあげるような例がある。(2a) はいずれも「たべもの」という意味がある ʔəcá と ʔəca を並列したもの、(2b) は ʔətaʔ 「のぼり」と ʔəcháŋ 「くだり」という対義語を並列したもの、(2c) は「たいらである」という意味の ŋiŋ に対して頭韻をふむ要素として ŋya を付加したものである^{注2}。

* 主要語句: マルマ語 (チベット・ビルマ語派ビルマ語群; バングラデシュ・チッタゴン丘陵)、音韻論、形態論、精巧表現、語形成、イオン化

^{注1} Ashaduzzaman & Rashel [2007–2008] はマルマ語の形態統語論を概観する。だが、音素分析がなされておらず、声調も表記されないなど、記述には疑問が散見される。

^{注2} ビルマ語の精巧表現については Okell [1969: 26–27, 53–54]、Jenny & San San Hnin Tun [2014: 89–90]、Wheatly [2014]などを参照。

- (2) a. 「たべもの」 M ʔəcá~ʔəca cf. B ʔəsá~ʔəsa
 b. 「のぼりおり」 M ʔətaʔ~ʔəcháj cf. B ʔətəʔ~ʔəshínj
 c. 「たいらな」 M ɲiɲɲiɲ~ɲyaɲya^{注3} cf. B ñĩñĩ~ñaña

構成要素が単独では意味をもたないものもある。(3)は、ビルマ語には対応形式が確認されていない例であり、頭韻をふんでいる。また、精巧表現は借用語にもありうる。(4)はパーリ語からの借用語である。

- (3) 「めちやくちな」 kəjaʔ~kərí (4) 「特徴とか」 M guɲ~θaiʔtĩ cf. B gouɲ~θaiʔtĩ

語彙的精巧表現の使用例を(5)にあげる。

- (5) ʔəmúɲ~ʔəmaiʔ =rō ʔəkɯθu ʔəlo loiʔ krě =rō =lé mə- rǎ.
 ELAB~大臣 =PL 全員 必要 追う 見る =SEQ =さえ NEG- 得る
 「大臣たちは全員理不尽な要求にこたえようとしたものの、できませんでした」

(2)~(5)にしめた例は語彙的に決定されており、予測不能な語形成をしている。だが、ビルマ語には確認されないけれども、マルマ語には生産的に形成されうる精巧表現が存在する^{注4}。本発表では、2以降で、マルマ語における生産的な手段による精巧表現について記述する。

2 生産的な精巧表現

マルマ語における生産的な精巧表現には大別して、(I) 名詞類にも動詞類にもかかわるもの、(II) 名詞類にのみかわるもの、(III) 類別詞にのみかわるもの、という三種類がある。数詞は精巧表現にかかわらない。

精巧表現は、たとえば Haas [1964: xvii] や Matisoff [1973: 81–82] などでのべられるところによれば、重複表現をふくむ四音節語からなる。しかし、Solnit [1995: 130] や Peterson [2010: 84] がのべるように、二音節語であっても精巧表現たりうる。マルマ語の精巧表現も、以下にのべるように、二音節語であるものもふくむ。

2.1 名詞類にも動詞類にもかかわる精巧表現

名詞類にも動詞類にもかかわる精巧表現には二種類ある。いずれも、中心的な意味をになう主要部は前部にある。

2.1.1 yaʔ 型の精巧表現

ひとつは、後部には **yaʔ** という要素があらわれる。yaʔ は単独でもよいし、音節数にあわせて韻をふんでもよい。具体的には(6)にしめすような形式をもつ。いずれも名詞の例である。

- (6) a. 一音節語: A~**yaʔ** ㉞「葉やら」 chí~**yaʔ** cf. chíのみで「葉」
 b. 一音節半語: CəA~**yaʔ**(A) ㉞「仕事やら」 ʔəlouʔ~**yaʔ** または ʔəlouʔ~**yaʔ**louʔ cf. ʔəlouʔ のみで「仕事」
 c. 二音節語: AB~**yaʔ**(B) ㉞「友人やら」 moiʔchwi~**yaʔ** または moiʔchwi~**yaʔ**chwi cf. moiʔchwi のみで「友人」

(6)の例は、いずれもイオン化(ionisation; Chao 1968: 159)しうる。すなわち、主要部と精巧表現要素とのあいだに助詞をはさみこんで対句とすることができる。(7)に例として目的格標識=ko|=go がはいつた例をしめす。

- (7) a. 一音節語: A=X~**yaʔ**=X ㉞「葉やらを」 chí=go~**yaʔ**=ko
 b. 一音節半語: CəA=X~**yaʔ**=X ㉞「仕事やらを」 ʔəlouʔ=ko~**yaʔ**=ko または ʔəlouʔ=ko~**yaʔ**louʔ=ko
 c. 二音節語: AB=X~**yaʔ**(B)=X ㉞「友人やらを」 moiʔchwi=go~**yaʔ**=ko または moiʔchwi=go~**yaʔ**chwi=go

^{注3} ビルマ語と比較したい、マルマ語では高母音に鼻音が先行するとき、語末に鼻音を付加するという現象(離隔同化)がある[藤原 2003]。ビルマ語アラカン方言にも同様の現象があることが報告されている[Okell 1995: 10–11]。

^{注4} バングラデシュの公用語であるバングラ語(ISO 639-3 ben)にも、生産的な精巧表現がある。バングラ語では、精巧表現の後部要素の第一音節を反舌音tにおかきかえる[Thompson 2010: 663]。たとえば「日本」japan から japan~tapan が派生しうる。このように、後部要素の第一音節を一定の子音でおきかえる種類の精巧表現はハルハ・モンゴル語(ISO 639-3 khk)[Kubo 1997]やサハ語(ISO 639-3 sah)[Ebata 2003]などにもしられている。

イオン化は助詞だけでなく句をはさむこともありうる。(8a)は類別詞句(tə-yə? “one-CL:man”)がはいる例である。比較のため、類別詞句が精巧表現にわりこまない例を(8b)にあげる。

- (8) a. moi?chwi+tə-yə?~ya?chwi+tə-yə? 「友人やら二人(友人一人と友人やら一人)」
b. moi?chwi~ya?chwi+tə-yə? 「友人やら一人」

動詞のばあいには、(9)にしめすように、イオン化した形式としてのみ使用されうる。ya? は単独でもよいし、音節数にあわせて韻をふんでもよい^{注5}。なお、ya? 型は動詞よりも名詞でよく使用されるようである。また、動詞では ya? 型よりも 2.1.2 で後述する thi 型のほうがよく使用されるようである。

- (9) a. 一音節語: A=X ya?=X
 ¶ 「仕事やら何やらする」 lou?=te~ya?=te (work(v)=RLS ELAB=RLS)
b. 一音節半語: CəA=X ya?(A)=X
 ¶ 「同情やら何やらする」 θəná=re~ya?(ná)=(t/r)e (feel.sorry=RLS~ELAB=RLS)^{注6}
c. 二音節語: AB=X~ya?(B)=X
 ¶ 「頼るやら何やらする」 ?ágú=re~ya?(kú)=(t/r)e (rely.on=RLS~ELAB=RLS)
 ¶ 「理解やら何やらする」 ná+le=re~ya?(le)=(t/r)e (understand=RLS~ELAB=RLS)
 ¶ 「勝つやら何やらする」 ?əŋmraŋ=re~ya?(mraŋ)=(t/r)e (win=RLS~ELAB=RLS)

2.1.2 thi 型の精巧表現

もうひとつは、後部に thi という要素があらわれる。thi は単独でもよいし、音節数にあわせて韻をふんでもよい。具体的には(10)にしめすような形式をもつ。いずれも名詞の例である。

- (10) a. 一音節語: A~thi ¶ 「薬やら」 chí~thi
b. 一音節半語: CəA~thi(A) ¶ 「仕事やら」 ?əlou?~thi または ?əlou?~thilou?
c. 二音節語: AB~thi(B) ¶ 「友人やら」 moi?chwi~thi または moi?chwi~thichwi

(10)の例は、いずれもイオン化しうる。(11)に例として目的格標識=ko|=go がはいった例をしめす。

- (11) a. 一音節語: A=X~thi=X ¶ 「薬やらを」 chí=go~thi=go
b. 一音節半語: CəA=X~thi=X ¶ 「仕事やらを」 ?əlou?=ko~thi=go または ?əlou?=ko~thilou?=ko
c. 二音節語: AB=X~thi(B)=X ¶ 「友人やらを」 moi?chwi=go~thi=go または moi?chwi=go~thichwi=go

動詞のばあいには、(12)にしめすように、イオン化した形式としてのみ使用されうる。thi は単独でもよいし、音節数にあわせて韻をふんでもよい。なお、thi 型は名詞よりも動詞でよく使用されるようである。また、動詞では 2.1.1 で前述した ya? 型よりも thi 型のほうがよく使用されるようである。

- (12) a. 一音節語: A=X thi=X
 ¶ 「仕事やら何やらする」 lou?=te~thi=re (work(v)=RLS ELAB=RLS)
b. 一音節半語: CəA=X thi(A)=X
 ¶ 「同情やら何やらする」 θəná=re~thi(ná)=re (feel.sorry=RLS~ELAB=RLS)
c. 二音節語: AB=X~thi(B)=X
 ¶ 「頼るやら何やらする」 ?ágú=re~thi(gú)=re (rely.on=RLS~ELAB=RLS)
 ¶ 「理解やら何やらする」 ná+le=re~thi(le)=te (understand=RLS~ELAB=RLS)
 ¶ 「勝つやら何やらする」 ?əŋmraŋ=re~thi(mraŋ)=te (win=RLS~ELAB=RLS)

^{注5} 精巧表現の ya? と同音の動詞に「なめる」 ya? がある。この動詞では、同音衝突のため、ya? による精巧表現がつかわれない。

^{注6} 否定では、音節数をあわせたもののほうがこのまれの。すなわち、mə-θəná~mə-ya? という形式はこのまれの、mə-θəná~mə-ya?ná という形式のほうがこのまれの。他の類例もおなじ。

2.2 名詞類にのみかかわる精巧表現

名詞類にのみかかわる精巧表現には二種類ある。主要部後置型では-i、主要部前置型では-a? という韻をふむ^{注7}。

2.2.1 主要部後置型 (-i型)

ひとつは主要部が後置される名詞類にのみ確認される。一音節語では、(13a)のように、第一音節の頭子音にiという韻をつけて前置する^{注8}。一音節半語または二音節語では、(13b)のように、第二音節を同様に処理する。

- (13) a. 一音節語: C(G)i~C(G)VC ♪ 「力」 ?i~?á cf. ?áのみで「力」
 b. 一音節半語: CəC(G)i~CəC(G)VC ♪ 「仕事」 ?əli~?əlou?
 c. 二音節語: ♪ 「友人」 moi?chwi~moi?chwi

(13) の例は、(14) にしめすように、いずれもイオン化しうる。

- (14) a. 一音節語: ♪ 「力やらを」 ?i=go~?á=go
 b. 一音節半語: ♪ 「仕事やらを」 ?əli=go~?əlou?=ko
 c. 二音節語: ♪ 「友人やらを」 moi?chwi=go~moi?chwi=go

イオン化は、助詞だけではなく、複合名詞でも可能である。(15a) に kemũj (ケーキ + お菓子) の例をあげる。(15b) のように、通常の-i型精巧表現も可能である。

- (15) a. kĩmũj~kemũj 「ケーキやら」
 b. kemĩ~kemũj 「ケーキやら」

(16) にしめすように、助詞そのものが精巧表現の対象ともなりうる。

- (16) a. rwa=mĩ~rwa=ma (village=ELAB~village=LOC) 「村で」
 b. rwa=li~rwa=lé (village=ELAB~village=too) 「村も」
 c. rwa=nĩ~rwa=nă (village=ELAB~village=COM) 「村と」

なお、主要部が二音節以上のとき、精巧表現要素は低声調の i であらわれてもよい。ただし、上昇調でいうほうが普通ではある。また、語によっては低声調ではいわないものもある。(17) に例をしめす。

- (17) a. 「お金やら」 táĩŋgi~táĩŋgá または táĩŋgi~táĩŋgá cf. táĩŋgá 「お金」
 b. 「給料やら」 lăji~lăja または lăji~lăja cf. lăja 「給料」
 c. 「問題やら」 kai?ci~kai?cǎ または kai?ci~kai?cǎ cf. kai?cǎ 「問題」
 d. 「友人やら」 khaŋbi~khaŋbóĩŋ または khaŋbi~khaŋbóĩŋ cf. khaŋbóĩŋ 「友人」
 e. 「勝利やら」 *?ɔŋmri~?ɔŋmraŋ, ?ɔŋmri~?ɔŋmraŋ cf. ?ɔŋmraŋ 「勝利」

-i型の精巧表現には副詞やオノマトペもありうる。ただし、(18) にしめすように、イオン化はできない^{注9}。

- (18) a. 「いやいやながらする」 khɔi?ti~khɔi?toi? lou?=te
 b. *「いやいやながらする」 *khɔi?ti lou?=te~khɔi?toi? lou?=te
 c. 「キラキラひかる」 proi?pri~proi?pra? pyaŋ=re
 d. *「キラキラひかる」 *proi?pri pyaŋ=re proi?pra? pyaŋ=re

^{注7} 精巧表現に類する表現においては、一定の音配列規則があることが知られている [倉部 2010]。概略、狭母音が前に、広母音が後にあらわれるというものである。マルマ語における精巧表現においても、名詞類にのみかかわる語形成にかんするかぎり、同様の傾向があるといえる。

^{注8} このiは、文語ビルマ語で属格をあらわし、緊喉調であられる {i} と関係があるかもしれない。ただし、マルマ語には文語ビルマ語の {i} に音形がそのまま対応する形式が確認されていない。一部の名詞の斜格にのみ、{i} の残滓としての緊喉調のみがあらわれうる。

^{注9} 生産的な語形成による精巧表現では、-i型の精巧表現について副詞が確認されている。語彙的な精巧表現もふくめて、副詞の精巧表現は一般にイオン化できない。

2.2.2 主要部前置型 (-aʔ 型)

もうひとつは主要部が前置される名詞類にのみ確認される。一音節語のばあいには、(19a) のように、第一音節の頭子音を保持し、aʔ という韻を後置する。二音節語のばあいには、(19b) のように、第一音節を同様に処理し第二音節は保持する。

- (19) a. 一音節語: C(G)V(C)~C(G)aʔ ㄱ 「雨やら」 mú~maʔ cf. múのみで「雨」
b. 二音節語: C(G)V(C)B~C(G)aʔB ㄱ 「友人やら」 moiʔchwi~maʔchwi^{注10}

一音節半語については、(19) に準じた語形成はほとんど確認されていない。(20a, b) にしめすようなものがわずかに確認されている。(20c, d) にしめすような例が不可能であるのは、同音衝突をさけるためであるかもしれない。

- (20) a. 「角(つの)やら」 ʔəgro~ʔəgraʔ
b. 「鬼やら」 bəlú~baʔlú または belú~baʔlú
c. 「*仕事やら」 *ʔəlouʔ~ʔəlaʔ, *ʔəlouʔ~laʔ; laʔ 単独で「手」
d. 「*言語やら」 *cəgá~caʔká; caʔ 単独で「機械」、káは「車」

thi 型と同様にイオン化も可能である。(21) に例をあげる。

- (21) a. 一音節語: C(G)V(C)=X~C(G)aʔ=X ㄱ 「雨やらを」 mú=go~maʔ=ko
b. 二音節語: C(G)V(C)B=X~C(G)aʔB=X ㄱ 「友人やらを」 moiʔchwi=go~maʔchwi=go
c. kemũŋ~kaʔmũŋ 「ケーキやら」

2.3 類別詞にのみかかわる精巧表現

類別詞の精巧表現として「一」にのみ使用されるものがある。təri という要素が後続する。(22) に例をしめす。

- (22) tə-CL~tə-ri ㄱ 「一人」 tə-yəʔ~təri cf. tə-yəʔ (one-CL:man) のみで「一人」

類別詞型の精巧表現では、イオン化できない (23a)。イオン化しない形式がもちいられる (23b)。

- (23) a. *tə-yəʔ=ko krě=re tə-ri=go krě=re (one-CL:man=OBJ watch=RLS one-ELAB=OBJ watch=RLS)
b. tə-yəʔ~tə-ri=go krě=re (one-CL:man one-ELAB=OBJ watch=RLS)

3 精巧表現と類似する表現との相違

本稿であつかう生産的な精巧表現は、語彙的な精巧表現や動詞連続、複合動詞と比較して、(24) にしめす点でことなる。すなわち、動詞的な生産的な精巧表現を否定するときは、否定辞 (mə-) を二回いう必要がある。否定辞を一回のみつかってすますことはできない (24a)。他方、語彙的な精巧表現においては、否定辞は二回でもよいし、語頭に一回でもよい。ただし、後部要素の語頭におくことはできない (24b)。なお、動詞連続では、後部要素の語頭に否定辞をおくことができる点で、語彙的な精巧表現とはことなっている (24c)。また、語彙的な複合動詞では、否定辞は語頭にしかおくことができない (24d)。

- (24) a. 「仕事やらない」 mə-louʔ~mə-thi; *mə-louʔ~thi; *louʔ~mə-thi; cf. louʔ~thi 「仕事する」
b. 「発展やらない」 mə-krí~mə-pwá; mə-krí~pwá; *krí~mə-pwá cf. krí~pwá 「発展する」
c. 「発展しない」 mə-krí mə-mraiʔ; mə-krímrαιʔ; krí mə-mraiʔ cf. krí(+)mrαιʔ 「発展する」
d. 「成功しない」 mə-ʔəŋmraŋ; *mə-ʔəŋ mə-mraŋ; *ʔəŋ mə-mraŋ cf. ʔəŋmraŋ 「成功する」 < ʔəŋ 「勝つ」 + mraŋ 「見える」

^{注10} 後部要素の第二音節に精巧表現要素をおき、moiʔchwi~moiʔchwaʔ とするような語形成は、「いわれればわかる」けれども「つかわない」とのことである。

4 周辺言語との比較

マルマ語がはなされるチッタゴン丘陵のチベット・ビルマ系少数民族語のなかには、マルマ語と類似した語形成による精巧表現をもつ言語が存在する。

4.1 クミ語の生産的な精巧表現

Peterson [2010, 2014] はクミ語 (Khumí, ISO 639-3 ckn) における精巧表現をあつかう。クミ語にも語彙的な精巧表現と生産的な精巧表現がある。生産的な精巧表現には、(25) にしめすようなものがある。

- (25) a. mi-maay (ELAB-fire) [Peterson 2010: 86]
b. tki-tkáay (ELAB-tiger) [Peterson 2010: 86]
c. bawhí-bawhuú (ELAB-swell.up) [Peterson 2010: 87]
d. krámi-krámoo (ELAB-Marma) [Peterson 2010: 87]

Peterson [2010, 2014] は言及していないけれども^{注11}、(25) にしめした形式は、マルマ語の-i型精巧表現とおなじものといってよい^{注12}。

4.2 チャック語の生産的な精巧表現

チャック語 (Cak, ISO 639-3 ckh) でも、藤原 [2008] では語彙的な精巧表現しかしめされていないけれども、生産的な精巧表現がある。(26) ~ (27) に例をしめす。

- (26) a. təví~təváij (ELAB~ お菓子)
b. káŋthi~káŋtháj (ELAB~ ニュース)
c. ʔapíʔsí~ʔapíʔsa (ELAB~ 小さい)
- (27) a. tiʔ~taʔ (料理道具-ELAB)
b. ʔachiʔ~ʔacháʔ (毒-ELAB)
c. taʔkəbuʔ~taʔkəbaʔ (灰-ELAB)

(26) の例は、クミ語と同様に、マルマ語の-i型精巧表現とおなじである^{注13}。(27) の例は、一見したところマルマ語の-aʔ 型精巧表現とおなじに見えるかもしれない。だが、(27) にしめした例はいずれも主要部の最終音節が-aʔ でおわるものである。(28) にしめすように、主要部の最終音節が開音節のときには-a、鼻音でおわるときには-aŋ が、韻をふむ要素としてあらわれる。つまり、チャック語では音節構造にしたがって韻が交替する。本稿でいう-aʔ 型とは、この点がことなる。

- (28) a. bwé~bwá (本 ~ELAB)
b. gənáij~gənáj (数字 ~ELAB)

5 おわりに

本発表ではマルマ語にみられる生産的な精巧表現を語形成の種類ごとに分類して整理した。この種の語形成はビルマ語にはみられない。だが、マルマ語周辺の少数民族語には特に 2.2.1 でのべた-i型の精巧表現がみられた。マルマ語はチッタゴン丘陵のチベット・ビルマ系少数民族にとって共通語であり、マルマ語からの借用は頻繁にみられる。-i型の精巧表現については、語彙そのものではなく、構造を借用しているとおもわれる。クミ語とチャック語以外の言語においても、類似した精巧表現が存在する可能性がある^{注14}。

^{注11} 語彙的な精巧表現のなかにマルマ語からの借用語があることは言及されている [Peterson 2010: 91]。

^{注12} ただし、iの部分の声調がどうなるかについては、Peterson [2010] ではのべられていない。例をみるかぎりでは、おおくのばあいiである。しかし、íのこともある。íは主要部に高声調要素があるときにあらわれるようにもみえるけれども、かならずしもそうではない。

^{注13} なお、(13) にみられるような、助詞そのものが変化する精巧表現は確認されていない。

^{注14} ただし、チッタゴン丘陵ではなされるチベット・ビルマ系のヒョウ語 (ISO 639-3 csh) を記述した Zakaria [2018] では、生産的な精巧表現についてふれられていない。

略号

*: 非文、~: ELAB 要素との境界、=: 接語境界、-: 接辞境界、+: 複合語境界、(+): 否定で分離可能な複合語境界、B: ビルマ語（大野 2000 に準じる）、C: 子音、CL: 類別詞、COM: 共同格、ELAB: 精巧表現において韻をふむ要素、G: 介子音、LOC: 場所格、M: マルマ語（発表者の一次資料）、NEG: 否定、OBJ: 目的格、PL: 複数、RLS: 現実法、SEQ: 継起、T: 声調、V: 母音

参考文献

- 大野徹. 2000. 『ビルマ（ミャンマー）語辞典』大学書林.
- 加藤昌彦. 2005. 「ポー・カレン語の対句法（parallelism）」中山俊秀・塩原朝子（編）『記述研究から明らかになる文法の諸問題』pp. 145–159、アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 倉部慶太. 2011. 「ジンポー語における対句表現」『言語記述論集』3: 37–57.
- 藤原敬介. 2003. 「マルマ語の音声に関する考察」『京都大学言語学研究』22: 237–300.
- 藤原敬介. 2008. 「チャック語の記述言語学的研究」京都大学大学院文学研究科博士論文.
- Ashaduzzaman, Mohammad and Md. Mostafa Rashel. 2007–2008. Morphosyntactic analysis of Marma language. *The CDR Journal* 3/4: 143–156.
- Bernot, Denise. 1958. Rapports phonétiques entre le dialecte marma et le birman. *Bulletin de la société de linguistique de Paris* 53: 273–294.
- Chao, Yuen Ren. 1968. *A grammar of spoken Chinese*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Davis, Heidi A. 2014. Consonant correspondences of Burmese, Rakhine and Marma with initial implications for historical relationships. MA Thesis, University of North Dakota.
- Ebata, Fuyuki. 2003. Paired words in Yakut (Sakha). *Turkic Languages* 7: 257–267.
- Emeneau, Murray Barnson. 1938. An echo word motif in Dravidian folk tales. *Journal of the American Oriental Society* 58: 553–570.
- Haas, Mary R. 1964. *Thai-English student's dictionary*. Palo Alto: Stanford University Press.
- Huziwara, Keisuke. 2008. An overview of grammatical particles in Marma. 第 41 回国際漢蔵語学会発表資料.
- Huziwara, Keisuke. 2011. Nominalization and related phenomena in Marma. In G. Hyslop, S. Morey and M. W. Post (eds.), *North East Indian Linguistics Volume 3*. New Delhi: Cambridge University Press India. pp. 105–119.
- Huziwara, Keisuke. 2016. *Cak-English-Bangla dictionary: a Tibeto-Burman language spoken in Bangladesh*. Dhaka: A H Development Publishing House.
- Jenny, Mathias and San San Hnin Tun. 2016. *Burmese: a comprehensive grammar*. London and New York: Routledge.
- Konow, Sten. 1903. Notes on the Maghī dialect of the Chittagong Hill Tracts. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 57: 1–12.
- Kubo, Tomoyuki. 1997. Reduplication Meduplication in Khalkha Mongolian. 『言語研究』112: 66–97.
- Maggard, Loren, Sayed Ahmad and Mridul Sangma. 2007. *The Marma and Rakhine communities of Bangladesh: a sociolinguistic survey*. Dhaka: SIL Bangladesh.
- Matisoff, James A. 2007. *The grammar of Lahu*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- Okell, John. 1969. *A reference grammar of colloquial Burmese*. London: Oxford University Press.
- Okell, John. 1995. Three Burmese dialects. In David Bradley (ed.), *Studies in Burmese languages*. Canberra: Pacific Linguistics A-83, pp. 1–138.
- Peterson, David A. 2010. Khumi elaborate expressions. *Himalayan Linguistics* 9(1): 81–100.
- Peterson, David A. 2014. Aesthetic aspects of Khumi grammar. In Jeffrey P. Williams (ed.), *The aesthetics of grammar: sound and meaning in the languages of mainland Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 219–236.
- Solnit, David. 1995. Parallelism in Kayah Li discourse: elaborate expressions and beyond. *Proceedings of the Twenty-First Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: Special Session on Discourse in Southeast Asian Languages*, pp. 127–140.
- Thompson, Hanne-Ruth. 2010. *Bengali: a comprehensive grammar*. London and New York: Routledge.
- Wheatly, Julian K. 2014. Delight in sound: Burmese patterns of euphony. In Jeffrey P. Williams (ed.), *The aesthetics of grammar: sound and meaning in the languages of mainland Southeast Asia*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 237–254.
- Zakaria, Muhammad. 2018. *A grammar of Hyow*. Ph.D. dissertation, Nanyang Technological University.

（附記）

本稿は科学研究費補助金（課題番号 16K02691）による研究成果の一部である。